

AMUSEMENT SQUARE stage

演劇空間スペースベン

「新春トーク」

〈文〉スペースベン代表・田中 勉

2001年の新しい世紀を迎えるに当り、今回もFANSに関わ

っていただいているお二人にお集まりいただきました。言わずと知

れた？お一人は毎月第3週に「プラスワンシアター」として上演し

続けている安達良春氏、あと一方は新世紀の第一弾の、このアミューズのステージの原稿を執筆して

いただいた、山田景子さんです。今回も、私、田中が司会をさせていただきます。

よろしく願います。

山田「遅ればせながら、あけましておめでとございませう」

安達「今年もよろしく願います」

—ところで山田さん、1月号の「捨てゆく世紀へ」超短編小説『消えたゲロおばちゃん』は、なかなか評判がよかったようですね。

山田「そうなんです。前から書いてみたいのもあったんですけど、あの時は何か閃いたというか、世紀の変わり目だからという訳でもないんですが、タイムリングが合っちゃったかなという感じでしようかね」

安達「イヤ、ちょっとリアルで気色悪いところもあったすけ

ど、面白かったす」

山田「でも、ひと昔前の長横町もああいふ雰囲気あったって聞いたことありますけど」

—あ、よく知ってますね。ひと昔前は、長横町でも、ごみ箱のポリバケツに頭突っ込んでゲロ吐いてそのまま寝込んだりしてた人、結構いましたもんね。

安達「そうなんですか？」

山田「20世紀と21世紀って暦の上では、ただ単に日めくり1枚めくるだけなんて思ってたんですけど、何か実際に会ってみると、ちょっと感慨深いものがありましてよね。あの短編小説を書けたのも、さっき言ったように、何かに押されたと言うか、動かされたものがあつたんじゃないかと思ったりもしますね」

—世紀の変わり目ですか？

安達「そう言えば、今年の市長の新春の挨拶を新聞で拝見しましたけど、今年のテーマというか、目標というか、去年までとは違ってたよな。『新世紀、時流への対応と前進』。なかなかいいですよ。去年までの「光を求めて」よりはずっといいと思います。新幹線開業が現実になったという意味もあるかも

知れませんが、今の時代、昔の財産で食ってるといふか、新しいものに挑戦できる大人は少ない中で、流石だと思いました」

山田「昔の財産で食ってるといふか、安達「んー、何て言ったらいいのかな。『何十年も生きてきて、今更やり方変えられない』とか、今の時代のニーズを把握してないのに、このやり方が正統派だとか思ってる人が結構いますよ。やり方っていうのは、時代時代が変わっていくものだと思うたりするんですよ」

山田「確かに、今の時代に合わせ時代代に媚びるっていうのと、アンテナを張り巡らせて、何歳になっても一生懸命でいるっていうのは全然違うことだよな」

—私も、人脈で仕事をするっていうのは嫌いですし、芝居の公演でスポンサーになつていただくにしても、企画書を持って、飛び込みで営業をして、人脈ではなく、企画で採用してもらえようかな形になつていかないものかと思ったりもしますよな。

山田「それはなかなか難しいところがあるかも知れませんが、気持ちはずっと持ち続けたいですよな」

安達「企画で飛び込み営業すると言えは、ちょっと話が変わりますけど、何か、『イカノフ』とかいう集団が立ち上がるようにしているとか伺いましたけど、どういうものなんですか？ 私

2月のFriday Amusement Negative Shop

■2月2日 (365回)

未定

■2月9日 (366回)

未定

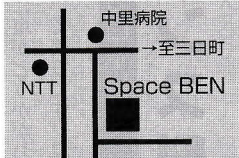
■2月16日 (367回)

安達良春プラスワンシアター
タイトル未定

■2月23日 (368回)

未定

※全て午後7時30分～、料金500円
チケットはスペースベンにて販売



駐車場はございませんので、車のご来場はご遠慮下さい。
(近くに西町書店駐車場有り)

スペースベン
八戸市柏崎1-11-8
☎FAX 43-9876

FANSの番組につきましては、デリーー東北の「あすのメモ」「きょうのメモ」欄でご確認下さい。

FANSでは、脚本を広く募集しています。何か表現したくても踏み出せないでいるあなた、一度「物語」を書いてみませんか？ FANSでは、そんな方の思いを大切に舞台にのせてみたいと思っております。

☎ スペースベン HPアドレス <http://www.hi-net.ne.jp/bunkakk8/SpaceBEN/>
Eメールアドレス bunkakk8@hi-net.ne.jp

「創造集団バノラマ屋」とかやってますんで、新しいものには、ちょっと興味があるんですけど、—はい。私もメンバーに誘っていただいて参加しているんですが、今年の9月に美術館で何か作品を創れないかということ、最初はモレキュラーシアターの高沢利策さんが提案したものなんですけど、今では広がりを見せてます。もともと演劇の上演を目的とした集団ではなく、しなやかに形を変えながら「表現とは何か？」でもないですけど、やる側と観る側の双方の表現を具体的にしていきたいという集まりですね。高沢さんの意図とはちょっとずれてるかな創ろうね」

山田「私にとっても演劇は、表現の手段の一つですけど」

安達「写真ですか？。その時は、是非私にも出品させて下さい」

—詳しくは来月号で紹介したいと思います。今日はありがとござい。山田さんもそろそろ作品創ろうね」